

20世紀中葉イングランドにおける医療と教育領域から見た病気療養児教育のずれ

豊田 英嗣（早稲田大学）

1. 本研究の目的

20世紀中葉イングランドは、病気やケガの治療のために入院を要する子ども（以下、病気療養児）への対応のあり方が見直された時代であった。医療と教育の狭間に位置づく病気療養児教育にはどちらの領域からも関心が注がれることとなり、教育省と医療専門家で構成される諮問委員会からそれぞれの見解が示された。しかし先行研究では、医療と教育領域の動向が別々に取り扱われ、両者を合わせての検討が十分になされてこなかった。本研究では、当時の医療・教育領域にて掲げられていた病気療養児教育像を明らかにし、二つの領域からみた像のずれがその後の展開に与えた影響について検討することを試みる。研究手法は文献研究を採用し、政府資料・諮問委員会に影響を与えた研究・関連する先行研究・新聞記事等を分析対象資料とした。

2. 病気療養児教育像の共通点と相違点

医療、教育領域のどちらにおいても、特殊教育の対象になりうる病気療養児の多様化が認識されており、教育を受けるのに十分に健康である子どもを取りこぼしてはならない、という姿勢が共通して示されていた。両者の役割は明確であった。医療専門家の役割は、自らの専門性を活用して子どもの教育可否性を判断し、その情報を迅速かつ正確に教育サイドに共有すること、そして病院内での教育環境づくりに貢献することであった。教員は、医療専門家の判断と配慮に基づいて、子どもに応じた教育活動を提供することが期待されていた。しかし教育の意義に関しては、領域ごとに重視するポイントが異なっていた。教育省は、病によって生じたハンディキャップをこれ以上大きくさせないために、教育を通じて病気療養児がいかに成長するか、何を学ぶかに主眼を置いていた。それに対し医療領域では、入院経験がもたらす子どもへのネガティブな心理的影響を最も危険視していた。そして、遊び（play, recreation）と同様に教育を子どもの退屈さを軽減するものと捉える側面があり、子どもの心理を安定させる機能をより期待する傾向にあった。

3. 二つの領域からみた「ずれ」とその後の展開

教育、医療領域における教育の意義の「ずれ」は、互いに十分に認識されないままであった。そして、1960-70年代における病気療養児の入院環境改善を求めた社会運動の中でも、子どもの心理的安定が優先的事項として取り扱われ、入院経験からより心理的影響を受けやすいとされる低年齢の子どもに焦点が当てられることになり、教育よりも「遊び」が重視されるようになった。